

研究論文

学長式辞から編む大学史

廣内 大輔

原田 健太郎

学長式辞から編む大学史

廣内 大輔¹⁾

原田 健太郎²⁾

¹⁾岐阜大学教育推進・学生支援機構

²⁾島根大学教育・学生支援機構

要旨

本研究は、大学の入学式および卒業式で学長が述べる式辞において、どのような事柄が語られてきたのかを、単一の国立大学を事例として調査したものである。調査対象校は宇都宮大学である。当該大学には、戦後新制大学として発足した昭和24年以降現在までの入学式および卒業式で述べられた式辞105本が保存されており、これらを分析し、頻出トピック、特徴的な語句について明らかにした。また、歴代学長のプロフィールとも関連づけて考察した。

結果として、主体的な学びや教養教育の重要性など現在にも通じる話題が繰り返し語られてきたこと。その一方で、大学の自治や学問の自由のように消えていったテーマが存在すること。歴史上の偉人の名前が登場することなどが明らかとなった。

キーワード：学長，式辞，大学史，自校教育，入学式，卒業式

1. 問題意識

本研究は、大学の入学式や卒業式において、学長が述べる式辞に着目し、大学史とりわけ自校史理解の観点から分析を試みるものである。

大学の式典における学長式辞には、当該大学の代表である学長の大学観、大学教育観が反映されていると考えられる。平成27年4月の信州大学入学式における学長式辞（注1）がその一例である。また、入学式や卒業式ではないものの、1867年にセントアンドリュース大学名誉学長に就任したJ.S.ミルによる演説も好例であろう（注2）。

入学式の式辞は、学生が入学後に初めて受ける教育と言え、大学生活への導入教育・初年次教育としての役割を果たしていると考えられる。また、卒業式（学位授与式）での式辞は、4年間の大学生活について振り返りを促し、社会への船出に向けたアドバイスが込められるという点で、キャリア教育の一環として機能する。このような性質を持つ式辞を発掘して分析を行うことは、自校史の編纂や自校史教育の観点から有益である。

なお、寺崎（2010a）は大学の自校史やそれを教育することについて、それが学校の「履

歴書」「自叙伝」「自己点検評価の報告書」であるために重要であり、沿革史やアーカイブを持つことは大学にとって必須要件であると述べている。また廣内・丸山（2013）は、大学基準協会の評価基準が「大学文書の保存と活用」を求めていること（注3）や、平成20年12月24日に発表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」が、初年次教育の一例として「自校の歴史の学習等」を示していることをあげて、自校史の記録と伝達の重要性を指摘している。

2. 先行研究の検討

学校行事で述べられる式辞に関しては、【1】式辞を集めて書籍の形にしたもの、【2】質的な分析を試みたもの、【3】量的な分析を加えたものが公表されている。

まずは【1】に該当するものとして、東京大学創立一二〇周年記念刊行会（1997）がある。これは、初代から第26代までの総長による式辞を一冊にまとめたものである。類似の研究として、佐藤・星野（2006）がある。これは、青森師範学校及び弘前大学教育学部の式典で披露された告辞、祝辞、謝辞、答辞を蒐集した小冊子である。

次に【2】であるが、小学校（国民学校）に着目した竹村（2003）がある。竹村は、一人の学校長が述べた複数の式辞に着目し、その流行と不易を調べた。竹村の研究によって明らかにされた、周囲の者に感謝せよという旨の語りは本研究でも確認できる。海外に目を向けると、アメリカの卒業式における著名人のスピーチを検討した小笠原・遠藤（2009）を見出すことができる。大学院を取り上げた研究もある。大学院の入学式を対象とした松本（2004）や、修了式に着目した船寄（2010）がそれである。

最後に【3】、すなわち量的分析を試みたものとして橋本（2016）がある。橋本は戦後の東京大学総長の式辞を解析し、戦後の東京大学総長が自校をどのように理解・認識してきたかを明らかにしている。

3. 分析対象

本研究では、国立大学の一つである宇都宮大学を対象とする。期間は、宇都宮大学が戦後新制大学として発足した昭和24年から平成27年6月時点までとする。すなわち初代学長の川口栄作から現在の石田朋靖までの全18人の学長（学長事務取扱を含む）による入学式と卒業式（学位授与式）での式辞を扱う。一部、入手できなかった式辞もあり、今回は入手できた105本を分析対象とした。

表1 分析対象とする式辞の数

代	学長等氏名	現存する式辞数	代	学長等氏名	現存する式辞数
初代	川口栄作	1本	事務取扱	近藤正巳	1本
第2代	鎗木外岐雄	8本	第9・10代	世良晃志郎	11本
第3代	山内源登	8本	第11・12代	馬場信雄	12本
第4代	萩原雄祐	8本	第13代	津布楽喜代治	8本
第5・6代	大政正隆	10本	第14・15代	貴志浩三	12本
事務取扱	小林隆治	1本	第16代	田原博人	4本
事務取扱	中村藤樹	2本	第17代	菅野長右エ門	2本
第7代	奥野俊	2本	第18・19代	進村武男	10本
第8代	山田伴次郎	4本	第20代	石田朋靖	1本

本研究で扱った「式辞」には、正確には「式辞」「訓辞」「告辞」「告示」という呼称が混在する。大部分は全文が記録されているが、一部の年には要旨しか記録されていないものもあった。式辞の大部分は、「宇都宮大学学報」に掲載されていたものであり、それらは現在、宇都宮大学図書館に所蔵されている。これらに加え、第1回入学式式辞については冊子化されているものを、第17代学長以降のものについては宇都宮大学のWebサイトで公開されているものを利用した。なお、本研究において「入学式」「卒業式」「学位授与式」とは、学士課程のものを指し、大学院や専攻科の式が独立して実施されているものは対象外とした。また近年、秋季にも式が行われているがこれらも除外している。

4. 分析の方法と視点

入手できた全ての式辞を読解し、出現トピックと出現語句について調査する。これにより得られたデータと、歴代学長のプロフィール、宇都宮大学の歴史、当時の時代背景、社会状況などを照らし合わせながら考察を加えていく。分析の対象となった学長および学長事務取扱の略歴を以下の表に示す。

表2 式辞の残る歴代学長等の略歴

代	就任年	氏名	出身部局または前職	出身校(学部以下)	出身校(大学院)	博士学位
初代	昭和24年	川口栄作	宇都宮農林専門学校長	北海道帝国大学		農学博士
第2代	昭和26年	鎗木外岐雄	東京大学教授	東京帝国大学	東京帝国大学	理学博士
第3代	昭和31年	山内源登	学芸学部	北海道帝国大学	北海道帝国大学、 京都帝国大学	農学博士
第4代	昭和35年	萩原雄祐	東北大学教授	東京帝国大学		理学博士
第5・6代	昭和39年	大政正隆	東京大学教授	東京帝国大学	東京帝国大学	農学博士
事務取扱	昭和44年	小林隆治	工学部	東京高等工業学校		工学博士
事務取扱	昭和45年	中村藤樹	教育学部	東京文理科大学		
第7代	昭和46年	奥野俊	教養部	北海道帝国大学		理学博士
第8代	昭和49年	山田伴次郎	農学部	東京帝国大学		農学博士、 工学博士
事務取扱	昭和53年	近藤正巳	農学部	東京帝国大学		農学博士
第9・10代	昭和54年	世良晃志郎	東北大学教授	東京帝国大学		
第11・12代	昭和60年	馬場信雄	教育学部	東北帝国大学		工学博士
第13代	平成3年	津布楽喜代治	教育学部	東京文理科大学		
第14・15代	平成7年	貴志浩三	工学部	大阪府立大学	大阪大学	工学博士
第16代	平成13年	田原博人	教育学部	立教大学	立教大学	理学博士
第17代	平成17年	菅野長右エ門	農学部	日本大学	東京大学	農学博士
第18・19代	平成21年	進村武男	工学部	金沢大学	金沢大学	工学博士
第20代	平成27年	石田朋靖	農学部	東京大学	東京大学	農学博士

※国立公文書館所蔵史料や宇都宮大学ウェブサイト等を参考に作成。
 ※大学院については、修士課程と博士課程とを区別せず両方を含めた。また、修了か退学かの区別もしていない。

5. 結果

5-1. 注目に値する式辞の発掘

昭和24年9月1日付、第1回入学式における初代川口栄作学長の式辞は興味深い。川口栄作は、明治28年生まれで大正8年に北海道帝国大学農学部を卒業している。宇都宮大学の前身校の一つである宇都宮農林専門学校長から、そのまま新制宇都宮大学の長となった。川口は、宇都宮大学が新制国立大学として発足して初めての学生を迎え入れるこの入学式において、教育基本法、学校教育法などの新制度の紹介をした後、「リベラルエデュケーション」(ママ)の意義を説く。次に、専門教育に輪をかけて人格の完成に努めるべきこと、政治活動に関わらないようにとの注意をする。

続けて、この日から遡ること1ヶ月強の昭和24年7月19日に新潟大学で行われたCIE顧問イールズ(Walter Crosby Eells)による講演の話を持ち出し、次のように述べるのである。

「過日新潟大学の開学式に於てイールズ(ママ)博士講演の中に研究の自由、思想の自由は大学教育の基礎であるが共産党員は思考の自由をもっていない、彼等は共産党に入党と同時にその自由を放棄したのであると述べられたことは真に正しき所見であつて、これは教授に対しても学生に対しても均しく当を得ているものと信ずるのである。特に本学開学に当たつて教授及学生に対し宇都宮大学の平和と自由を守るよう切望して止まない。」(旧字体は新字体に改めた)

当時、いわゆるイールズ旋風が吹き荒れていたことを考慮しても、新しい民主主義の時代に寄与する新制大学の栄えある第1回入学式において、合法政党を否定するような式辞が読み上げられたことは注目に値しよう。

なお、この日、入学式の会場には、占領軍栃木民事部教育情報課長フリードリックが来ており、学長式辞と新生代表の宣誓の後に祝辞を述べている。また、イールズ自身はこの日から約半年後の昭和25年3月23日と24日の両日、タイパーとニューフェルドと共に宇都宮大学を訪問しており、23日には反共演説を行っている(下野新聞、1949年3月24日付、第1面)。

5-2. 頻出トピック

次に、複数の年に出現するトピックについて報告する。宇都宮大学で読まれた式辞には以下のようなメッセージが現れていた。

【1】大学に進むことができなかった人たちのことを考えよ

歴代学長のうち、この話題を最初に持ち出したのは第3代学長の山内源登である（昭和32年度卒業式）。山内は、「不幸選にもれ進学を思いとどまった多数の青年」に対して、進学できた者はきちんと勉学する責任があると述べている。山内は学長在任中、さらに2度このトピックについて式辞で語っているが、そのトーンは強くなる傾向にあった。昭和33年度卒業式では、大学に進学しなかった同世代の若者が「諸君の勉学のために汗して納税している」と唱える。高校を出た若者は18歳を境目に、働いて税を納めることで大学を支える者と、働かず税も納めず支えてもらう者とに分かれることを強調するのである。昭和34年度入学式では、「諸君の周囲には志を達し得ず失望している友人、また既に職についている多くの人々が諸君を複雑な気持で眺めていること」と説き、このことを忘れることなく勉学に励めと発破をかけている。

ちなみにこの山内源登は、エリートコースとされた旧制高校から帝国大学へと続く道を順調に歩んではいない。長野県立松本中学校を出た後、父親の意向に抗えず東京高等蚕糸学校に進学。その後、北海道帝国大学に全科選科生として身を置きながら、同大学予科の卒業検定試験に合格することで学士号を取得した苦労人である（山本，2009）。大学院は北海道帝国大学と京都帝国大学の2校に在学。大学以外にも、郡是製糸株式会社や財団法人蚕糸科学研究所などに勤めたことがある。こうした経歴を通じて、大学に学ぶことの有難さを痛感していたと推察できる。

東京大学教授から第5・6代学長となった大政正隆も同じ話題を取り上げている。

「最後に、私は、諸君に訴え、諸君に考慮をうながしたいことがある。それはこうである。（改行）諸君は、幸にも、入学試験を通過して、本日、無事私と教官諸氏とにあいまみえることができた。しかし諸君は、諸君の後には千数百人の不幸にして合格しえなかつた高校卒業生がひかえていることを忘れてはならない。合格といい不合格といい、その間には、なんらみるべき差別はないのである。学生定員に限りあるために、ただそれだけのために、たとえ僅差であつても、その間に、人為的な線をやむなく引いたのはわれわれ大学当局である。私は、このことを心から悲しく思う。私の良心は、年毎に重なるこの悲劇に耐えられないのである。」（昭和40年度入学式）

この式辞が読まれたのは昭和40年。日本の高等教育は昭和38年に進学率（大学と短期大学を合わせた値）が15%を超え、トロウの言うマス段階へと突入した。大政の在任期間中だけでも、我が国の大学は80校以上新設され、全国の大学生の数は約1.6倍になるが、進学希望者の増加と大学の新設がせめぎ合う状況下においては、一点の差で涙を飲む受験生の姿がより強い印象をもたらしたとも考えられる。

第 9・10 代学長の世良晃志郎と第 11・12 代学長の馬場信雄もこの話題を受け継いでいる。世良と馬場だけで、都合 10 を超える式辞の中で繰り返し述べている。

しかしこの話題は、平成 3 年に就任した第 13 代学長津布楽喜代治以降、ほとんど登場しない。平成 15 年入学式で田原がわずかに触れる程度である。大学進学率が既に 4 割近くになったこの当時、大学に進めない者が不可視化していったことや大学に進むことの価値が以前よりも相対的に低下したこととも関係していよう。

【2】主体的に学ぶことの大切さ

大学に入るにあたり、受験勉強のスタイルから、大学での学びに相応しい主体的なものに変わることを願うものである。昨今、アクティブラーニングの説明で用いられる、「受動的」、「能動的」というタームがそのまま登場することもある（昭和 46 年度入学式、昭和 57 年度入学式）。

この手の話は、昭和 40 年度入学式の大政正隆から、学長事務取扱の中村藤樹、第 7 代学長の奥野俊、第 9・10 代の世良晃志郎が訴えており、受け身の消極的な姿勢ではなく、主体的に学ぶことの大切さが半世紀近く前から繰り返し語られていたことを示している。

昭和 40 年度入学式にて大政は、分からない点があれば研究室を訪ね、足らない知識があれば図書館を訪ねよと具体的な方法にまで言及している。また大政は昭和 43 年度入学式でも、「教えられるところをただ記憶するといった態度に慣れることは盲目的に他の意見に追従する習性を養うもので」あって、そうではなく、「諸君は自ら学び自ら開発する覚悟をもち、「**正当な批判力を育てなければならない**」と説いている。

昭和 59 年の世良晃志郎もまた、高校と大学とでは勉強の仕方が異なることを訴えている。ここで世良は、大学での勉強にはただ一つの答えにたどり着かないものがあること、今まで、「勉強ができない」「勉強は嫌いだ」と思い込んでいた者でも開花できることを述べて、学習観の転換を促している。

【3】教養教育の重要性

今回、分析した 60 年有余年に渡る式辞全 105 本の中では比較的初期にこの種の話題が登場する。開学から昭和 30 年代半ばにかけてである。これらの話は、戦後新たに出発した新制大学が旧制大学とは異なるものという解説でもあった。

例えば、昭和 24 年度の第 1 回入学式での川口栄作の式辞では、「専門分野の専門家になること以上に人格の完成に努めること」が大事と述べており、旧制大学との対比を意識した内容となっている。

第 2 回卒業式では鏑木外岐雄が、新制大学卒業者が旧制のそれと比較して学力的に劣っているという指摘がなされていることを紹介し、これに反論するような形で、新制大学は、旧制大学がすぐ役立つ人間を育てていたのとは異なり、「**使えば使うほど妙味を発揮する潜在的可能性のある人間を育成**」することを語る。ここでも教養の大切さが説かれており、川

口が触れた新制大学の理念を再確認する内容となっている。

このような、教養が大事との言説は 21 件確認できた（第 11・12 代学長馬場信雄までで 16 件、以降 5 件）。開学から昭和 35 年までと昭和 50 年代前半に目立つが、近年でも確認できる。

【4】周囲の人々に感謝せよ

時代とはあまり関係なく見出すことができる。学生が今まさに式に列席できている背後には、両親、小さい頃からの学校の先生など周囲の人の支えがあったからこそということ説し、その支援に感謝しなければならないと説くものである。

第 9・10 代学長の世良晃志郎はこれを強調した一人である。法制史学者として知られる世良は昭和 56 年度卒業式においてこう述べる。「諸君は、卒業にあたって、諸君の御父兄や恩師、さらには今まで諸君の成長を助けてくださったその他多くの人びとに対して、感謝の気持ちを新たにしてください。感謝の気持ちをもつことは、人間に対する愛情につながり、これから諸君が社会生活を送ってゆく上において、非常に重要なことのひとつであります」と。

馬場信雄も毎年のように同じ趣旨を繰り返している。馬場が残した 12 の式辞のうち 11 において、このことが確認できる。

このような語りは、先行研究として挙げた竹村（2003）でも確認されており、学校生活の節目で説く教えとしては適当なものと言える。

【5】学問の自由・大学の自治

この種の語りは、昭和 30 年代の終わりから昭和 50 年代半ばにかけて見られるものの、近年は姿を消してしまった話題である。在任中、一貫してこのトピックに触れた学長が第 8 代の山田伴次郎である。山田は歴代学長の中で唯一、農学博士と工学博士の 2 つの博士号を持つ学長である。彼は同一の内容を毎年繰り返し次のように唱えた。

すなわち、大学と社会との関係として話を切り出し、国立大学は、「社会との関連性を重視し、社会の養成に正しく答え、社会の進展に寄与しなければならぬ」ことを言い、しかしながら、「大学における学問と研究の自由を保障するために、歴史的に社会的慣行として認められてきた大学の自治は堅く守らなければならない」とつなげるパターンであった。

【6】自校史の伝達

本稿の冒頭でも述べたように、式辞を分析して後世に伝えることが自校史につながるといふ本研究の前提に立てば、実際に述べられた式辞の中で大学の沿革がどのように語られてきたかについてはぜひ注目しておきたい。

第 2 代学長の籙木外岐雄が、昭和 27 年度（昭和 28 年）と昭和 30 年度（昭和 31 年）の卒業式において、戦後生じた 2 度の火災について言及している。2 度の火災とは、新制大学として開学する直前の昭和 24 年 5 月 29 日に農学部本館を焼失したことと、昭和 27 年 2 月

20日に学芸学部を襲った火災を指している。昭和34年度(35年度)卒業式の山内源登は、農学部、学芸学部のいずれにも前身校から続く歴史があることに触れている。

自校史を述べることは、連続する2人の学長をまたいで受け継がれることもある。例えば昭和50年代前半、第8代学長の山田伴次郎は、新制大学として発足してからの年数を毎年のように述べた。これに影響を受けてか、山田の後を継いだ学長事務取扱の近藤正巳は詳細な沿革について言及している。昭和54年度入学式における近藤の式辞では、前身校の校名をあげることに始まり、当時の学生定員や職員定員、2度の火災で校舎を消失した悲劇、宇都宮工業短期大学の包含、大学院設置など、こと細かく新入生に説明しており、式辞自体が自校史教育の機能を果たしているものとなっている。

また近年では、第18・19代学長の進村武男が大学の歴史に触れることを恒例としていたが、現在(第20代)学長である石田朋靖も同様にしており、式辞内容の踏襲が推測できる。

5-3. 偉人、著名人の登場

歴史上の偉人や注目を浴びている著名人の名をあげることも多数見受けられた。式辞に登場した人名として以下のものを確認した。

イールズ博士, エマーソン, カーライル, オリバーロッジ, コナント博士, ウェンデル・L・ウィルキー, ジョン・デューイ, フルシチョフ首相, シュバイツァ博士, クラーク, ヒットラー, 本居宣長, 賀茂真淵, シュンペーター, バートランド・ラッセル, バーナード・ショー, 山本有三, 渡辺茂, エレン・ケイ, 平塚らいてう, 福井謙一, 童門冬二, ケネディ, 高村光太郎, 堀尾輝久, 広中平祐, 石川忠雄, 板倉聖宣, 夏目漱石, エーリッヒ・フロム, 柴門ふみ, 小泉信三, 武者小路実篤, 中野孝次, 孟浩然, 土岐善麿, 向井千秋, 猪口邦子, 宇野千代, 世阿弥, 鷺田小弥太, もろさわ・ようこ, 下村寅太郎, 高田万由子, 森田草平, 島崎藤村, 司馬遼太郎, 坂本竜馬, 高杉晋作, 清水選手(清水宏保), クリントン大統領, ブレア首相, 松本幸四郎, 武谷先生(武谷三男), フランシスコ・ザビエル, 坂田先生(坂田昌一), サン・テグジュペリ, 田中正造, 毛利さん(毛利衛), 福田栃木県知事, 小西ゆかり, アル・ゴア, ゲーテ, パスツール, キューリー夫人, アインシュタイン, 本多光太郎, カント, ジャン・ジャック・ルソー, 寺田寅彦, 谷田貝豊彦, 吉田兼好, ヘレン・ケラー, アレクサンダー・グラハム・ベル, サリバン先生, ホーキング博士, サラ・ベルナルド, ソクラテス, ロバート・ジェームス・ウォラー, 鈴木梅太郎, 道元禅師, 加賀の千代, ピタウ博士。

表3 式辞に現れた語句の例

学長等氏名	年	入・卒	出現語句例
川口栄作	昭和24年	入	リベラルエデュケーション、イールズ博士、共産党、33名の女子大学生
鈴木外岐雄	28	卒	報恩感謝の心、日本育英会、期成同盟会、学問的精神、文化国家
	28	入	新制大学、祖国再建、真理探究、大学の自由、政治行政的権力
	29	卒	コメンメント、学制改革、独立第3年、エマーソン、祖国の発展
	29	入	永遠の真理、大学の使命、オリバー・ロッチ、終戦後8年半、民主主義国家
	30	卒	蛍雪の功、不慮の災火、学問的精神、学問的能力、カーライル
	30	入	コナント博士、ヴェンデル・L・ウィルキー、ジェントルマンシップ、スポーツマンシップ
	31	卒	コメンメント、Boys be ambitious、学園の復興建設、新日本の建設
山内源登	31	入	ジョン・デューイ、象牙の塔、全人教育、原子力、人格教育
	32	卒	旺盛なる研究心、ナツバ服、民族の繁栄、人類の幸福、ノイローゼ
	32	入	国連加盟、民主国家の建設、原子力時代、オートメーション時代
	33	卒	教養人としての気品、国民の師、寛容の精神、宇都宮大学出身者たるの誇り
	33	入	諸君一人当り40数万円の予算、一般教養、学問的情熱、健康維持
	34	卒	考えることをしない機械、中道、家族隣人国家社会の繁栄、人格の完成
	34	入	琉球、留学生、学問的情熱、自治、プライド、健康
萩原雄祐	35	卒	恐怖のバランス、雪どけ、ブロック経済、貿易の自由化、保護政策、前身校
	35	入	沖縄、真理を探究、旧制大学、旧制高等学校、単なる職工、自治
	36	卒	起き上がり小坊子、達磨大使、科学的思索、宇都宮は田舎
	36	入	入学試験、人工衛星、師弟の愛、コミュニティー、人格の陶冶
	37	卒	郷土の方々、勇気、忍耐、至誠、科学的思索
	37	入	オアシス、文化の温床、入学試験、秀才、人格の修養、教授
	38	卒	刻苦勉勵の賜、将来の覚悟、揺籃、試験地獄、草葉の陰
大政正隆	38	入	最高学府、将来日本の指導者、政治、自治、クラブ活動、人格識見
	39	卒	学校生活、愛、信頼、燃える情熱、鋼鉄の意志
	39	入	学問の自由、大学の自治、一般教育、読書、工学部
	40	卒	フルシチヨフ首相、核爆発の実験、シュバイツァ博士、札幌農学校、クラーク
	40	入	受動的、能動的、図書館、オートメーション、電子計算機
	41	卒	ベトナムの戦乱、研究の心、勉学はこれから、人間形成、健康
	41	入	高等学校、受動的、能動的、権利、人権、民主主義社会
小林隆治	42	卒	人間愛、黒い霧、2.26事件、ヒツラー、自主性の欠如
	42	入	一般教養、旧制高等学校、大学自治、政治斗争、大学人
	43	卒	高度成長、昭和元禄、マイホーム時代、ベトナム、民族主義
	43	入	人間形成、正当な批判力、エリート意識、大学の自治、大学紛争
	44	卒	大学は創造の府、自由、人間性喪失、大学紛争、NHK
	44	入	学士院賞、鈴木梅太郎博士、ドイツ、大学の自治、大学人
	44	入	科学万能の波、レジヤ、万国博覧会、華やかな20世紀、1970年
中村藤樹	45	入	大学問題、情報化社会、大学の自治、徳性の涵養、新制大学
	46	卒	努力と意思の尊さ、希望、愛、ユートピア、人間性回復
奥野俊	46	入	受動的、能動的、自主的、高度成長、平和憲法
	47	卒	戦後の産業優先、高度成長、16年間の学校生活、平和憲法、国際主義
山田伴次郎	50	入	真理の探究、想像力の涵養、人間形成、学問・研究の自由、大学の自治
	51	入	高等教育の大衆化、保健管理センター、情報工学科、学問の自由、大学の自治
	52	入	高等教育の大衆化、カリキュラム、ゼミナール、学問の自由、大学の自治
	53	入	高等教育の大衆化、大学と社会との関係、道元禅師、中庸、一般教養
近藤正巳	54	入	連合大学院、旧制高校、一般教養、TV、マスメディア
世良晃志郎	55	入	受験勉強、旧制高等学校、われわれは思想の自由をもっており、知識人
	56	卒	修士、公害、自然破壊、南北問題、消費者
	56	入	五月ボケ、自由からの逃亡、一般教育課程、専門馬鹿、シュンペーター
	57	卒	学問的にものを考える、知識人、科学技術、悪の克服、文化大革命
	57	入	青春、受身の勉強、能動的、知的創造、バートランド・ラッセル
	58	卒	軍事力、南北問題、南南問題、知識人、悪

学長式辞から編む大学史

学長等氏名	年	入・卒	出現語句例
世良晃志郎	昭和58年	入	サークル活動, 旧制高校, 世界観, やる気, ファシズム
	59	卒	生涯学習, 自然破壊, 食糧問題, エネルギー資源, 人類絶滅の危険性
	59	入	バーナード・ショー, やる気, 青春, 旧制高等学校時代, バートランド・ラッセル
	60	卒	大学自治, 社会悪, 学問的にものを考える, 山本有三, 因果関係
	60	入	5月ボケ, 知的創造, 一般教養課程, 専門バカ, 世界観
馬場信雄	61	卒	学位記, 学士の称号, 師弟愛, 報恩, 教職員を代表しての式辞
	61	入	受験勉強, 点数になりにくいもの, 教養部, 他律的, 自律的
	62	卒	遺伝情報, 全国民の支援, 課題解決, 為替レート, 創造的行動
	62	入	入学試験の難関, 情報社会, 主体的, 自立的, 克己心
	63	卒	農学博士, 国際化社会, 情報化社会, 宇都宮大学同窓生
	63	入	入学試験, 自己実現, 受動的, 知識の花園, 感受性
	平成元年	卒	報恩の心, 国際化社会, 情報化社会, 学術情報, 同窓生
	元	入	共通第一次学力試験, 他律的, 自律的, 履修計画, 点数になりにくいものを大切に
	2	卒	自己実現, ハード, ソフト, 国際情報社会, 宇都宮大学同窓生
	2	入	受験勉強の重任, 学生便覧, 知識の花園, データ, 師弟同学
	3	卒	大学という学校体系の最終段階, 湾岸戦争, 暗黒の月曜日, データベース, 留学生諸君
津布楽喜代治	3	入	目標の再構築, 学問の府, 研究する態度, 五体五感, 点数になりにくい事柄が大切
	4	卒	冷戦体制からの脱却, コメンメント, 環境破壊, 国際地球年, 教育基本法
	4	入	ベビーブーム, 役割免除, 役割猶予, 青年期, 多文化理解
	5	卒	児童の世紀, 智恵子抄, 自己変革, 冷戦体制, バブル経済
	5	入	青年期, 留学生受入れ10万人計画, レッテル文化, 守破離, 大学入試センター試験
	6	卒	マニュアル, ブランド志向, philosophy, 世紀末, マディソン郡の橋
	6	入	自由からの逃走, スチューデント・アパシー, 国際学部, 学習ランド, キャンパスライフ
	7	卒	阪神淡路地区の大震災, ボランティア活動, 風姿花伝, 日本国憲法, 民主主義と平和
貴志浩三	7	入	国際学部, カリキュラム改革, 男女平等社会, 阪神淡路地区の大震災, 知的興味
	8	卒	グローバル, 世界の共生, 学問に王道なし, パスポート, 阪神大震災
	8	入	ポーニア大学, 足利学校, 学生の交通事故, 恩, ボーダレス
	9	卒	人間復興, 人間性回帰, 消費文明, ボーダーレス化, 大志
	9	入	共生・友愛, 不慮の事故等にも十分注意, 諸刃の剣, 自己責任, 理性の時代
	10	卒	学位記授与者, 学歴, 学校歴, 3万5千の諸先輩, 井の中の蛙
	10	入	「大人」扱い, 勇気, 好奇心, 入魂, 卒業論文
	11	卒	学校歴, 学問歴, モドキもの, 地球資源の枯渇, 多量廃棄
	11	入	知脳集約型産業, 少子高齢化, 知的好奇心, 自己責任, 情報化時代
	12	卒	本格志向, 学位記, ミレニウム, IT革命, 学問歴
	12	入	西暦2000年, 知性のセンター, 大学と社会, インターネット, バーチャルリアリティ
	13	卒	学問歴, 国際的, グローバル, 21世紀, 心眼, 留学生
	13	入	天職, 人生のシナリオ, 大学と社会との関係, 21世紀
田原博人	14	卒	ラ・マンチャの男, 経済至上主義, 食糧問題, 弁証法の諸問題, 国立大学
	14	入	足利学校, 米百俵, なんでも相談窓口, 多額の国費, 主体的な学び
	15	卒	星の王子さま, 三反運動, プロジェクトX, 国立大学, インターネット
	15	入	大学構成員, 国立大学法人宇都宮大学, 足利学校, 日光国立公園, 田中正造
菅野長右エ門	18	入	知識基盤社会, 国立大学法人宇都宮大学, 初期セミナー, リテラシー教育, 構成員
	19	卒	地球温暖化, 不都合な真実, 環境報告書, 地域貢献度, 宇都宮大学樹木憲章
進村武男	21	入	地域貢献度, オプティクス教育研究センター, 教養教育, 国際交流協定
	22	卒	リーマン・ショック, 国立大学法人, 学習機関, 運営費補助金, 持続可能な社会
	22	入	地域連携, キヤノン株式会社, 産学官連携, 課外活動, 異分野連携
	24	卒	東日本大震災・原発事故, 寛容の精神, 産学官連携, ホームカミングデー, 母国発展
	24	入	寛容の精神, 体育系や文科系サークル, 読書, 人間性の涵養, 寺田寅彦
	25	卒	浴びる英語, TOEIC試験, 行動的知性, イノベーション, 同窓会
	25	入	高度専門職業人, 浴びる英語教育, 教室外における活動, キャリア教育科目, サークル
	26	卒	英語教育の大改革, グローバル化, 母校, 学び直しの機関, 宇大スピリッツ
	26	入	大学英語教育学会賞, 宇都宮高等農林学校, キヤノン株式会社様, トムソン・ロイター
	27	卒	TOEIC試験, ストール, 国立大学改革, イノベーション, 宇大スピリッツ, 寛容の精神
石田朋靖	27	入	教職大学院, 地域デザイン科学部, アクティブラーニングという形式の授業, 3C精神

6. まとめ

以上、105本の式辞分析を通じて次のことが浮かび上がってきた。

まず、全体として、式辞を構成する要素つまり登場する語句やトピックには、入学・卒業に対する学生および保護者に向けた祝いの言葉、進学できなかった人のこと、能動的に学ぶことのすすめ、大学の自治、学問の自由、教養教育の大切さ、大学の沿革、旧制高校・旧制大学との比較などがあった。

これらが含まれていることはある程度パターン化しており、前年度を踏襲したと考えられるものも多かった。数年間にわたる在任中、ほとんど同一の式辞を使い続けた学長もいた。また、学長が代替わりしても共通性が見いだせることがあり、新たに就任した学長が先代の書いた式辞を参考にしている可能性がある。

時代を追うごとに消滅していった話題と、継続的に語られるもののが存在する。例えば、教養教育の意義については時代が下るにつれて頻度は下がるものの、60年近く強調されてきたトピックである。一方で、進学できなかったものへの配慮というものは、最近では登場しない。

なお、最近になって新たに登場する言葉もある。「運営費補助金」や「TOEIC試験」である。全体的に、昔は人類や世界について理念的に語ろうとする学長が多かったのに対して、近年では、極めて現実的な内容が増加している。

主体的な態度や能動的な学習等は、はるか以前から論じられてきた事柄であり、必ずしも宇都宮大学において新たな概念であるとはいえない。今の時代で言うアクティブラーニングと関連する事項を論じた学長は以前から存在することが確認できる。ただし、本を読む、読み書きそろばんなどの基礎的なスキルを要求することも多い。

最後に、宇都宮大学が国立大学であることを示す特徴として、税金で運営されていることや社会に貢献すべきことが論じられている。果たして、これが「国立」という公的セクターであるがゆえか、それとも大学としての特性を表現したものかは明確ではない。私的セクターでの調査し、国公立大学と私立大学の違いについての調査も必要となろう。

残された課題としては以下のようなものがある。本研究は、学長の式辞を分析するという点では試論の域に留まるものであり、一次史料である式辞を読解するという原始的な手法によって行ったため、その結果から著者二人の主観を抜き去ることができていない。今後は質的文書分析ソフトを活用して、語句の出現を計量的に捉え、その頻度と年代の確定の精度を高めていくことも重要である。また、それぞれの式辞は、学長自らが筆を取ったものかどうかも明確でないことも記しておきたい。

【注】

- 1) 信州大学入学式において山沢清人学長が新生に向けて語った式辞の中で、スマートフォンの使用をやめるか、それとも信州大学生をやめるかと述べたとされる出来事。この発言部分だけが注目されニュースとなった。
- 2) 大学教育とりわけ教養教育の大切さを説くスピーチ。その演説内容は岩波文庫の一冊『大学教育について』として刊行されている。
- 3) 大学基準協会（2009）は、内部質保証に関する「評価の視点」として、「大学沿革史の編纂」や「大学文書の保存と活用」を挙げている。

【参考文献】

- 宇都宮大学（川口栄作）（1949）『宇都宮大学の創設と教育方針』。
- 宇都宮大学教育学部史編纂委員会（1989）『宇都宮大学教育学部百十五年史』。
- 宇都宮大学大学史編纂委員会（1990）『宇都宮大学四十年史』。
- 宇都宮大学農学部創立 50 周年記念事業会（1973）『宇都宮大学農学部創立五十周年記念誌』。
- 大藤修（2010）『検証イールズ事件～占領下の学問の自由と大学自治～』，清文堂出版。
- 小笠原はるの・遠藤昌子（2009）「アメリカの大学におけるコメンツメントスピーチ（一）～J・K・ローリングとオプラ・ウィンフリー～」『比較文化論叢』（札幌大学文化学部紀要）第 23 号，pp.7-42。
- 作道好男・作道克彦（1985）『宇都宮大学農学部六十年史』教育文化出版教育科学研究所。
- 佐藤三三・星野英興（2006）『転換の時代の教師・学生たち～青森師範学校・弘前大学教育学部祝辞・答辞集～』（弘大ブックレット No.1），弘前大学出版会。
- 鈴木敬（1992）「山田伴次郎先生を悼む」『土と基礎』第 40 巻第 7 号，社団法人土質工学会，p.i。
- 大学基準協会（2009）『新大学評価システム ガイドブック：平成 23 年度以降の大学評価システム』，p.22。
- 竹村英樹（2003）『「入学式・卒業式式辞」からみた戦前戦中戦後の教育観の変遷～東京のある小学校長が書いた式辞の分析～』『慶應義塾大学教職課程センター年報』第 12 号，pp.81-118。
- 寺崎昌男（2010a）「自校教育の意義と可能性～教育理念と学校史の展開を踏まえて～」『追手門学院大学教育研究所紀要』第 28 号，pp.1-16。
- 寺崎昌男（2010b）「自校教育の役割と大学の歴史～アーカイブスの使命にふれながら～」『金沢大学資料館紀要』第 5 号，pp.1-17。
- 東京大学創立一二〇周年記念刊行会編（1997）『東京大学歴代総長式辞告辞集』，東京大学出版会。
- 橋本鉦市（2016）「大学の自己認識に関する一試論～東大総長の入学式・卒業式辞内容の計量テキスト分析から～」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 55 巻，pp. 129-138。

- 平田哲男（2002）『レッドページの史的究明』，新日本出版社。
- 廣内大輔・丸山剛史（2013）「宇都宮大学自校教育科目「宇大を学ぶ」の創設と実践」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第36号，pp.363-370。
- 船寄俊雄（2010）「2. 学長式辞に見る修士に求められる資質」，神戸大学百年史編集委員会編『神戸大学百年史』（通史Ⅱ新制神戸大学史），神戸大学，pp.904-906。
- 堀源一郎（1979）「萩原雄祐先生を偲ぶ」『東京大学理学部廣報』第10巻第5・6号，東京大学理学部，pp.8-9。
- 松本敬子（2004）「アカデミックな場におけるコミュニケーション～大学院入学式における総長式辞の『学び』の概念～」『大阪大学言語文化学』第13号，pp.161-173。
- J.S.ミル（竹内一誠訳）（2011）『大学教育について』岩波書店。
- 山内源登（1968）「札幌の思い出」『札幌同窓会誌』第3号，pp.37-39。
- 山本美穂子（2009）「北海道帝国大学農学部の選科制度について」『北海道大学大学文書館年報』第4号，pp.20-49。
「宇都宮大学学報」。
- 宇都宮大学 Web サイト。
- 「赤追放こそ眞の“学の自由”」，下野新聞，昭和25年3月24日（金曜日）付，1面。
- 「『スマホやめるか，大学やめるか』信州大入学式で学長」，朝日新聞デジタル（2015年4月5日）<http://www.asahi.com/articles/ASH44578MH44UOOB007.html> 2015年6月25日確認）。
- 「就学率及び進学率（昭和23年～平成17年）」（総務省統計局データ），www.stat.go.jp/data/chouki/zuhyou/25-12.xls，平成28年10月20日確認。
- 「大学の学校数，在籍者数，教職員数（昭和23年～）」（「政府統計の総合窓口」）
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015843>，平成28年10月20日確認。
- 第14・15代学長貴志浩三の出身大学（学部）については以下のサイトによった。
<http://www13.plala.or.jp/osakapref/20022member2.htm>（平成28年10月24日確認）。
- ※以下は国立公文書館所蔵史料
- 『宇都宮大学第1冊』。
- 『宇都宮大学第2冊』。
- 『国立大学長』（昭35）第1冊。
- 『国立大学長』（昭39）第1冊。
- 『国立大学長』（昭45）第1冊。
- 『国立大学長』（昭49）第1冊。
- 『国立大学長』（昭58）第4冊。
- 『昭和二十六年任免閣議了解人事卷十八』。
- 『二級官進退（本省及直轄）』。

【謝辞】

本研究のきっかけを与えてくださったのは宇都宮大学教育学部の丸山剛史先生である。丸山先生からは、式辞に着目するというアイデアに始まり、宇都宮大学内に式辞が保存されていることなど貴重な教えを受けた。

東京大学大学院教育学研究科の橋本鉦市先生は、筆者が本研究を日本高等教育学会で発表した際注目してくださるとともに有益なアドバイスと励ましを下さった。

宇都宮大学図書館は式辞の入手に関して快く協力して下さいました。以上、感謝して記しておきたい。

One University's History Compiled from Presidents' Speeches

Daisuke Hirouchi

Organization for Promotion of Higher Education and Support, Gifu University

Kentaro Harada

Organization for Education and Student Support, Shimane University

Abstract

This study focuses on speeches given by successive presidents of a single national university and clarifies what types of messages were delivered to the students. The research object of the study is Utsunomiya University, a national university in Japan. 105 speeches, which were delivered at entrance ceremonies and graduation ceremonies by 18 presidents from 1949 to the present, are analyzed and reveal frequently appearing topics and characteristic words. In addition, the authors examine the profiles of each president. As a result, these are the new findings: 1) Topics concerning positive learning and liberal arts education appear repeatedly. 2) Some topics have disappeared, for example, university autonomy and academic freedom. 3) Names of many famous people are also mentioned.

Key Words: university president, speech, university history, own-university education, entrance ceremony, graduation ceremony